

飛鳥資料館の秘蔵物 (1) 七支刀レプリカ

飛鳥資料館の倉庫には様々な所蔵品が眠っています。この中には、国の重要文化財の貴重な考古資料をはじめレプリカまで様々なものが多数あります。これらのうち、展示のために倉庫から出され、皆様にご覧頂く所蔵品は、ごく一部だと言えるでしょう。そういった所蔵品の中で、当館が所蔵する、すこし変わった資料や、なかなかご覧頂く機会が無い秘蔵のお宝を、このシリーズで紹介していきたいと思えます。

今回取り上げる秘蔵物は、「七支（枝）刀レプリカ」です。このレプリカは、1967年度に加藤義行氏によって製作され、文化庁が管理していましたが、1976年から飛鳥資料館が管理をおこなうことになり、現在に至ります。

七支刀と聞いて、どのような刀をご想像される

でしょうか？ 七支刀とは、奈良県天理市石上神宮に伝わる全長約75cmの鉄製の刀で、刀身から6つ枝分かれした刃が出ており、ちょっと風変わりな形状をしています。また、刀身の表裏には、61の文字が刻まれています。千数百年前に造られた七支刀は、形状に目が惹かれますが、日本と大陸との関連を示す、最古の文字資料でもあります。実物は保存状態が良好とは言えず、銘文の一部が摩滅しており、もどかしいことに一部の文字が判読できないため、解釈には諸説あり、論争が長く続いています。

皆様は、この謎めいた七支刀に彫られた文字をどのように解釈されるのでしょうか？ 飛鳥資料館に眠る七支刀レプリカも、その謎が明らかにされる日を待ち望んでいるかもしれません。

(飛鳥資料館 成田 聖)



【銘文】 (表) 秦■四年五月十六日丙午正陽 造百練鋼七支刀 ■辟百兵 宣供供候王■■■■■
(裏) 先世以来未有此刀 百濫王世子奇生聖徳 故為倭王■造 伝示後世